

(様式1)

令和6・7・8年度「京都府学力・学習状況調査～学びのパスポート～」
学校改善プラン(2年次)【小学校】

【学校名等】

学校名	南丹市立園部小学校							校長名	芦刈 毅	
学 年	1 年	2 年	3 年	4 年	5 年	6 年	特別支援	児童数	543 名	
学級数	3	3	3	3	3	3	7			
事業担当教員名	小寺 功彦									
① 中学校区で目指す子ども像		人とのつながりを大切にし、主体的に生きる子どもを育成しよう ～ 保幼小中が一体となって取り組む非認知能力の育成を目指して ～ ふるさとを愛し、夢をかなえるために、 知力、心力、体力の向上を目指すそのべの子の育成								
② 目指す子ども像		目指す児童像「考える子 やさしい子 努力する子 たくましい子」 研究推進におけるテーマ 「つながりを大切にし、主体的に学ぶ子どもの育成」 ～適用題から振り返る授業改善を通して～								
③ 目指す子ども像に対する現状と課題		明るく元気で素直な児童が多い。 一方で、精神的に幼い児童も多く、自己中心的で自分の思い通りにならないと、拗ねたり乱暴な言葉になったりする児童も少なからずいる。人間関係が構築されると挨拶ができる児童も増えてくるが、自分から気持ちの良い挨拶ができる児童は少ない。 学習については、教師の指示を理解し行動することができる。しかし、受動的に授業を受ける児童が多く、全体的に学習意欲はあまり高くない。特に粘り強く考えたり取り組んだりする学習には、課題が見られる。また、言葉の力や表現の弱さから、学習面では表現力に課題があり、生活面ではトラブルが起こることがある。 教職員の説明や友だちの意見を最後まで集中して聞くことができない。								
④ 目指す子ども像に達するための仮説		【仮説１】適用題からふりかえる授業改善 昨年度の研究では、導入時に「前時の授業や問題とのズレ」から授業を展開し、「ふりかえり」でメタ認知させたり教師の言葉かけを大切にすることで自己肯定感を高めたりする授業作りをしてきた。 今年度は昨年度の積み上げに+α「適用題からふりかえる授業改善」として適用題に向かう児童の様子から、何が良かったのか。また反対に、適用題になると出来ない子が多かったなら、授業展開をどう改善していけばその課題が解決できるのかを日々の授業から振り返ることで、児童の学力と教師の授業力を高めることが出来るのではないかと。 【仮説２】非認知能力の向上 教師のあたたかい言葉かけや、振り返りのコメントなど、児童のメタ認知を高める教師からの働きかけによって、自己の成長を実感し、自己肯定感が高まったり、自信がついたりするのではないかと。そして、「もっと算数の学習をがんばりたい」という意欲につながるのではないかと考える。 そのために、児童にかける言葉の内容やタイミングについて考えたり、振り返りの返し方について考えたりする。								

令和8年2月18日現在

【 1 研究主題】

【園部中学校ブロック】

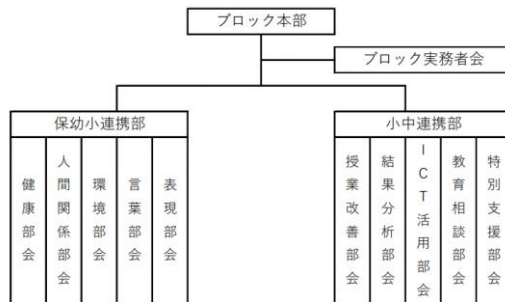
学びのパスポートの活用による認知能力と非認知能力の一体的な指導の在り方について

【園部小学校】

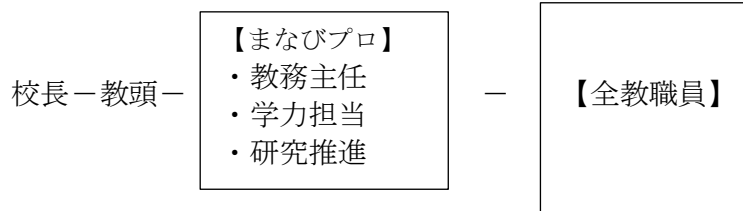
他者とのつながりを大切にしながら、主体的に学習に取り組む児童の育成

【 2 研究組織体制】

(1) 中学校ブロックの組織体制



(2) 校内の組織体制



【 3 具体的な取組内容】

園部中学校ブロックとしての取組

- (1) ブロックで統一の重点目標を設け、その変容を学びのパスポートを活用し、分析する。
- (2) 分析結果を基に、ブロック全体での授業改善の方向性を共有し、各授業改善の具体的な取り組みにつなげる。
- (3) 各校で取り組んでいる独自の研究を交流し合い、より効果的な取組となるように系統的な整理を行う。例えば、探究的な学習において、小学校で行う地域学習などの様々な取組の中に探究的な要素を取り入れ、それらを中学校で行う課題解決型学習を行う素地として、中学校での取組につなげるようにする。
- (4) 個別最適な学びと協働的な学び、認知能力と非認知能力等、どちらかを育成するのではなく、バランス良く育成できるように意識的に計画していく。

園部小学校における取組

- (1) 学力補充の時間を利用し習熟度別に分け、複数体制で指導をする。また、配慮の必要な児童にも時間をかけて個別で指導する。
- (2) 残された課題の克服をするためにも、算数科を基軸として、教科、領域の横断的な取り組みにも力を入れ、学力と非認知能力の向上を目指す。
- (3) 全国学力状況調査、学びのパスポート、東京書籍標準学力テストを実施し、一人一人の学力実態を経年分析する。分析結果をもとに、学力や学習に取り組む姿勢に課題の見られる児童に対し、その背景を分析した上で具体的な指導・支援の目標や方法を明確にする。また、授業研究会など定期的にその成長の過程をみていく機会をもつ。
- (4) 行事や特別活動、日々の学習でこういった非認知能力を伸ばすのか等を児童にも考えさせることで、児童にも非認知能力を認識させるような取組を行う。

【4 仮説及び成果を検証するための質問項目】

学年	質問番号	質問項目	概念	備考
4年	(43)	人の話をじっくりと聞くことで、自分の考えがまとまることもある。	思考の柔軟性	
5年	(43)	人の話をじっくりと聞くことで、自分の考えがまとまることもある。	思考の柔軟性	
	(52)	失敗してもあきらめずに何度も挑戦するほうだ。	チャレンジ精神	
6年	(43)	人の話をじっくりと聞くことで、自分の考えがまとまることもある。	思考の柔軟性	
	(52)	失敗してもあきらめずに何度も挑戦するほうだ。	チャレンジ精神	

* 5、6の分析項目は削除しています。

【7 分析結果を踏まえた指導改善、個に応じた具体的な手立て】

個に応じた具体的な指導・支援方法 ○学力補充の時間に習熟度別に分け、担任外も入って複数体制で指導する。その時に、配慮の必要な児童にも時間をかけて指導できるようにする。 ○分析結果をもとに、学力や学習に取り組む姿勢に課題が見られる児童に対し、その背景を分析した上で具体的な指導・支援の目標や方法を明確にする。また、授業研究会など定期的にその成長の過程を見ていく機会をもつ。 ○教職員の声かけを大切にして児童が意欲的に取り組んでいる場面や姿勢を、プラスの言葉にして伝え、児童に自覚させることで粘り強く取り組む姿勢や学習への意欲など非認知能力の向上を図る。 ○AIドリルを活用し、授業や家庭学習において個々の理解の度合いに応じた課題に取り組むことで基礎学力の向上を図る。
集団としての具体的な指導・支援方法 ○ICTを活用した授業をどの学年もほぼ毎日のように行い、活用スキルについては向上している。この力を、「分かる」「できる」につなげるための活用の在り方を検討・工夫していく。 ○チャレンジする意欲については全体的に高いものの、自分で考えることや困難な問題に粘り強く立ち向かおうとする児童は多くない。授業のあり方をもう一度見つめ直し、丁寧すぎる指導、深く考えなくても分かる指導を改善し、意欲を学力へと結びつけていく必要がある。 ○読む力に課題があることから、朝読書や週末読書を取り入れ、読みの力を伸ばしていく。 ○家庭学習において、現学年の以前の既習事項についても復習ができるよう内容を工夫する。また、予習や自主学習といった指定の宿題以外の家庭学習ができるよう、取組の具体例を示すなどして学習量の増加を目指す。

【8 仮説の修正】

--

【9 具体的な取組内容の修正】

--

【10 児童の変容（普段の様子から）】

〈個に応じた具体的な指導・支援方法〉

- 学力補充の時間に習熟度別に分け、担任外も入って複数体制で指導する。その時に、配慮の必要な児童にも時間をかけて指導できるようにする。

【成果】

それぞれのコースにおいて課題の量や内容を調整したことで多くの児童の学習量が確保される中、粘り強く取り組む様子が見られた。特に、課題の大きい児童に対して手厚く対応したことにより、児童が自分自身では解くことが難しい課題に、支援を受けながら最後まで取り組もうとしていた。また、習熟度別の学習を通して児童が自身の学力について振り返る様子が見られ、自分に適した学習の場を改めて選択し直すこともあった。

【課題】

特に高学年においては学力補充の時間自体を設定することが難しかった。また配慮の必要な児童の指導に時間をかけるためのコース数、指導人員の確保が課題である。

- 分析結果をもとに、学力や学習に取り組む姿勢に課題の見られる児童に対し、その背景を分析した上で具体的な指導・支援の目標や方法を明確にする。また、授業研究会など定期的にその成長の過程を見ていく機会をもつ。

【成果】

昨年度より、学力テストの分析をもとに各学級で個の視点、集団の視点で目標を設定し、定期的に振り返りながら指導を進めている。今年度も継続して取り組み、焦点化した児童については目標達成に向けたステップを設定し指導している。短期的にみると大きな改善とまではいかないケースが多いものの、ステップとして設定している段階に着実に進む児童の様子がある。

【課題】

各学級で設定した目標についての共有がうまくできておらず、その取組が学級担任とその学級に関わる教職員の中だけのものとなってしまう状況がある。

- 教職員の声かけを大切にして児童が意欲的に取り組んでいる場面や姿勢を、プラスの言葉にして伝え、児童に自覚させることで粘り強く取り組む姿勢や学習への意欲など非認知能力の向上を図る。

【成果】

教職員が意識して肯定的なフィードバックをすることにより、児童の学習に取り組む意欲を高めている。低学年では児童の取組に対する教師の肯定的評価の影響が波及しやすく、どのようなところが良かったのかを全体の場に返すことで、友達の良い姿をまねて取り組むことも多く見られた。高学年では取組の過程に対する個別的な評価によって、個々の児童が自分の成長や良さを自覚することにつながっている。

【課題】

非認知能力について、中学校ブロックの方針や本校の実態をもとに向上を目指して取り組んでいるが、現時点ではその変容について客観的データとしては捉えられていない。

- AI ドリルを活用し、授業や家庭学習において個々の理解の度合いに応じた課題に取り組むことで基礎学力の向上を図る。

【成果】

そのべっ子タイム（10 分間の学習タイム）や家庭学習を中心に、AI ドリルを活用した課題を設定し取り組んでいる。児童が AI ドリルに慣れてきたこともあり、課題や復習問題だけでなく、自主的に課題を選択し取り組む様子が見られている。2 学期には「小テスト→習熟課題→再テスト」のサイクルで取り組ませることにより、全体的に点数の上昇が見られたことから、基礎学力の向上に一定の効果があったと考えている。

【課題】

設定された課題についてはほとんどの児童が取り組んでいるが、自主的に AI ドリルを活用して学習することについては、個人差が大きい。傾向として学力の上位層がよく活用しており、低位層の活用が少ない。

〈集団としての具体的な指導・支援方法〉

- ICT を活用した授業をどの学年もほぼ毎日のように行い、活用スキルについては向上している。この力を、「分かる」「できる」につなげるための活用の在り方を検討・工夫していく。

【成果】

特に算数科の授業においては、各時間の学習内容を全ての児童が理解し、活用できることを目指して、適用題への取組の様子を視点を研究を進めてきている。児童の ICT 機器の活用に対する関心・意欲は非常に高いが、ICT 機器の活用を目的化しないことについて教職員で共通理解し、活用場面を精選している。その中で、ごく一部ではあるが「児童が・必要な時に・必要な機能を使って」という活用の仕方も見られている。

【課題】

学習の中で ICT 機器を活用している場面について、児童の「分かる」「できる」という視点から効果的であったのかどうかについては検討を重ねていくことが必要だと感じている。

- チャレンジする意欲については全体的に高いものの、自分で考えることや困難な問題に粘り強く立ち向かおうとする児童は多くない。授業のあり方をもう一度見つめ直し、丁寧すぎる指導、深く考えなくても分かる指導を改善し、意欲を学力へと結びつけていく必要がある。

【成果】

授業研究会での学びや、学年を中心とした日々の授業に関する交流をもとに授業展開を工夫することで、児童が意欲を維持しつつ学習に取り組むことにつながられている。また児童が一人で考えることが難しい場合に、友達や教職員の支援をもとにして考えようとする様子も見られている。

【課題】

難しい問題に出合ったときに、自分で解ける見通しが持てず考えることをあきらめてしまう児童が見られる。既習事項が定着していないために、考えることそのものに難しさを抱えている場合もある。

- 読む力に課題があることから、朝読書や週末読書を取り入れ、読みの力を伸ばしていく。

【成果】

朝読書については静かに落ち着いて取り組む習慣が身についてきている。また、月に数回ではあるがボランティアの方による読み聞かせの機会を設け、お話の世界への興味関心を高めることから、読むことへの意欲を育んでいる。自分で読むことには消極的な児童も、読み聞かせの世界には引き込まれていることが多い。

【課題】

読む機会を設定しているが、それだけで読む力の向上を図ることは難しい。読むことが得意でない児童にとっても読む経験を重ねられるような手立てを工夫したり、国語の学習を中心に内容理解や語彙の定着につながる取組を並行して行ったりすることが求められる。

- 家庭学習において、現学年の以前の既習事項についても復習ができるよう内容を工夫する。また、予習や自主学習といった指定の宿題以外の家庭学習ができるよう、取組の具体例を示すなどして学習量の増加を目指す。

【成果】

AI ドリルの活用と共に、学力テストにおいて伸びの見られた 6 年生の取組を共有し下学年へと広げた。これまでの家庭学習は現在学習している内容についての課題が大半であったが、教科や内容の幅を広げ、広く復習できるものとした。これにより、既習事項の定着状況について教師にも児童自身にも明らかになり、児童の自己理解が深まるとともに、教職員が実態に即した指導を行う上での資料とすることができている。

【課題】

本来の意味での自主学習により、学習量を増やしている児童は少ない。与えられている課題についてはまじめに取り組める児童が多いが、自ら課題を見つけて取り組むことができるようになるには、学年を越えた系統的な指導が必要だと感じる。

【11 3年次の研究構想】

- ・ 目指す児童像の教職員間での共有と検証
- ・ 中学校ブロックでの共通実践の充実と評価基準の作成
- ・ これまでのものを含む、蓄積されたデータの可視化による分析、ブロックでの共有
- ・ 「主体的・対話的で深い学び」を実現するための園部小スタイルの確立
- ・ 「考える」「考えを持つ」ことを大切にした授業
- ・ 学校生活全体を通した非認知能力の向上の取組
- ・ 取組や活動の見える化（チャレンジ精神の向上）
- ・ 学年段階に応じた家庭学習の取組の推進（学習量の増加）
- ・ 実態に応じた基礎学力の定着と向上（個別・集団）
- ・ 「読む力」を高める取組
- ・ ICTの効果的な活用の検討